たゆまぬ努力が落ち着いた風景をつくる――

備中高梁の町並み

東京大学大学院
都市工学専攻教授
西村幸夫

寅さんが2回やってきたまち

葛飾柴又の江戸川沿いのスーパー堤防内部に寅さん記念館というユニークな博物館施設がある。その中庭部分に合計48作の映画「男はつらいよ」シリーズで寅さんが訪れたことのある全国各地のプレートが日本地図のようにちりばめられている。そのなかでひときわ光彩を放っているのが、寅さんが2回も訪れた岡山県高梁のプレートである。「寅次郎恋歌」(第8作、1971年)と「口笛を吹く寅次郎」(第32作、1983年)の舞台が高梁だった。

寅さん映画のロケ地に関しては、各地で熱心な誘致合戦が繰り広げられたのは有名な話である。そのなかで高梁が2度も選ばれたのは、妹さくらの夫の出身地という設定もあるだろうが、いかに高梁が雰囲気のあるまちであるか、さらにはその趣を長年にわたって保ってきたかを物語っている。

実際歩いてみると、高梁川中流域に開けた盆地に立地する、ほどよい大きさのまちであることがわかる。コンパクトななかに石火矢町(第8作のロケ地)や片原町の武家屋敷、本町を中心とした町家群、薬師院(第32作のロケ地)など東側の山裾に立地する立派な石垣を持った寺院群、そして山城の備中松山城と城下町の4点セットが見事にそろっている。しかもそれぞれが一級品なのである。とりわけ、まちなかを流れる紺屋川界隈は、桜並木や川の上部にしつらえられた恵比須宮の小祠が目を引く。都市の風情と山あいの自然とが渾然として熟成した、唯一無二の風景が生み出されている。

12年目を迎える高梁再発見事業

しかしながら、いかに魅力的なところであっても、まちをただ歩いているだけでは窺い知れないことがある。それは高梁の人たちがいかにこのまちを魅力的にするために努力をしてきたかということである。その好例として高梁商工会議所が実施している高梁再発見事業がある。1995年から始まって今年で12年目を迎えるという息の長い事業である。

この再発見事業はわくわく子供フェスタ、高梁まちづくり塾、頼久寺ガーデンコンサート、遠州茶会、1市4町合併シンポジウム、新高梁市小学生サミット、子育てふれあいフェスティバルなどなど、文字通り高梁を「再発見」するための各種イベントの集合である。これらはたまたま手元にあった2004年度の報告書に掲載されているものだが、このほかにも町並み探検隊や親子で登ろうお城山、岡山幻の日本酒を飲む会、日本三大山城サミット(ちなみにあとふたつの山城は大和高取城〈奈良県高取町〉と美濃岩村城〈岐阜県恵那市〉だという)など、商工会議所らしくない非収益型?で楽しめる活動が満載である。

どうして商工会議所がこういうことをやるようになったのか。馬力のある職員がいたからというのが簡単な答えであるが、その背後には、まちが輝くためには商業や工業が興隆するだけでは不十分だという思いがあった。商工業者の事情だけでなく、幅広いまちづくりを進めるなかで、高梁の歴史や文化を見直すことから始めなければ、商工業者のまとまりも底の浅いものになってしまう、足腰の強いまちはできないという思想が根底に共有されているのである。まちが「再発見」されてこそ、まちに住み続けることに希望が持てるというものなのだ。

"建築"ではなく"町並み建築"の表彰

こうした活動を通して歴史的な建物の保存や再生が続けられてきた。たとえば、商工会議所は1996年に「たかはし町並み建築デザイン賞」を設立し、これまでに計3回、合計28棟の建物を表彰している。各回それぞれ500通を超える自薦他薦の応募があるというのはいささか驚きである。選ばれたのは、個人住宅の改装や「駄菓子の店」というのれんがさがる菓子店の新築、モダンデザインの美容院から鉄道をまたぐ連絡通路橋まで多様であるが、いずれも周辺の町並みに調和している点では折り紙付きのものばかりだ。

紺屋川沿いでは、木造2階建ての元農機具倉庫が空き家になり、解体の危機にあったが保存運動の甲斐があって、現在は市が買収し、観光物産館「紺屋川」として再生されている。この建物は第2回町並み建築デザイン賞(2001年)を受賞している。こうした賞が設けられたのにはわけがある。1990年、旧市街からほど近いところに吉備国際大学が新しく開学したのに伴って、市内に学生向けマンションの建設が始まった。これまで木造2階建てばかりだった高梁の旧市街地に薄いせんべいのような鉄筋コンクリート造のマンションが突然建設されるようになったのである。こうした事態に直面して、商工会議所は、本来の高梁らしい建物の姿はかくあるべしと民間に広く訴えることが大切だと考え始めた。それが町並み建築デザイン賞になった。したがってこの賞は「建築デザイン」賞ではなく、「町並み建築」デザイン賞なのである。

高梁の落ち着いた町並みの魅力はこのようなたゆまぬ努力によって支えられているということを忘れてはならない。

風土が生む色 備中吹屋

高梁市は2004年10月、周辺4町と合併し、新高梁市が誕生した。消えた町の中に川上郡成羽町がある。ここには国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている備中吹屋の町並みがある。銅山とベンガラで栄えた鉱山集落である。建物もベンガラ塗り、屋根も赤黒い石州瓦で、全体に赤みがかった沈んだ渋い色彩に統一された美しいまちである。

こんな魅力的なまちが新しく高梁市の仲間に加わった。これからの高梁の魅力みがきにさらに拍車がかかることだろう。

西村 幸夫
にしむら ゆきお
東京大学工学部都市工学科卒業 同大学院修了
明治大学助手 アジア工科大学助教授
MIT客員研究員 コロンビア大学客員研究員
などを経て現職
専門は、都市計画、都市保全計画、市民のまちづくり論など
世界文化遺産の評価等を行う世界遺跡記念物会(ICOMOS)前副会長 文化審議会専門委員
東京都景観審議会部会長 「たかはし町並み建築デザイン賞」審査委員長など
著書「都市保全計画」「町並みまちづくり物語」など多数

格式ある武家屋敷のまち 長屋門と土塀が続く石火矢町 県指定ふるさと村

山城として日本随一の高さ 標高430m 臥牛山上の備中松山城 国重要文化財

薬師院と松連寺 備中松山城の砦として築かれた城廓づくりの豪壮な石垣 県指定重要文化財も多い

屈指の豪商 池上家邸宅 高瀬舟船主 問替商 醤油製造などを営み 現在は市商家資料館 後方の学生向けマンションが町並みの課題

頼久寺 愛宕山を借景にした蓬莱式枯山水庭園 石組とサツキの大刈込が美しい 江戸初期 小堀遠州の作庭

備中吹屋 江戸期ベンガラで発展し美しい景観を形成 国重要伝統的建造物群選定 県指定ふるさと村

まちなかを流れる紺屋川 恵比須宮の小祠 向こうに町並み建築デザイン賞の観光物産館「紺屋川」